



元祿九年の地子町肝煎裁許附にも千日町とあり。當町雨實院の開祖雄勢、伊勢神宮へ千日參詣せし由縁に依つて、千日町と稱すとしへり。

○千日山雨實院

眞言宗也。寺記に云ふ。當寺開祖雄勢諸國を修行し、京都清水の大悲殿に一七日參籠せしに、靈夢を蒙りけるに依つて、直に伊勢路に趣き、皇太神宮に至り、千日參籠し、祈願滿ちたるを以て、文祿四年八月本國加賀に歸り、金澤に於て一寺創立し、嘗て千日川の勤行を全くせし緣故を以て、千日山雨實院と號す。慶安二年三月廿一日雄勢九十六歳にて遷化し、墳墓を石川郡泉野に築く。世人千日塚と呼べりと。三州志には、雨實院の開山雄勢寛永年中に參籠せしよし記載す。龜尾記に、雨實院は右實、左實の兩童子を安置す。故に兩實院と名付くべきを、文字を散草書にして誤りたるかと或人いへり。とあり。今按するに、此の説非なり。兩童子より起りたる院號なるべし。

○千日塚

石川郡地黃煎村の村地にあり。三州志に云ふ。雨實院の開

山雄勢、寛永十四年より同十九年まで、千日の間伊勢大神宮へ參詣す。其の往來恙なく志願成就せし由を彫刻して、泉野に塚を築き、千日塚と號し、碑石を建てたり。然るに、享保十四年碑石缺損し、再び新碑を建つといへり。加賀古蹟考には、白山の社へ千日參詣せん事を誓ひ、金澤より白山の社へ不斷參詣しけるに、遂に誓願の如く、一千日滿ちけるに依つて、塚を築きて千日塚と號すとあり。平次按するに、千日塚の傳説、いづれ正説ならんか。千日の山籠りなどいへる事は、いにしへの行者共常になしたりけん。千載集釋教に、

比叡の山に堂衆・學徒不和の事出來て、學徒皆ちりける時、千日の山ごもりみちなん事の近く、ひじりの跡を絶えん事を歎きて、かすかに山洞にとまりて侍りける程に、冬にも成りにければ、雪ふりたる朝に尊圓法師のもとに遣しける。法印 慈圓

いとしくむかしの跡や絶えなんと

おもふもかなし今朝のしら雪

世を連れて後那智にまうで、侍りけるに、そのかみ千日の山ごもりし侍ることをおもひて、瀧のもとにかきつけ侍りける。法眼 慶融

みとせへし瀧の白糸いかなれば

此の外古今著聞集に、助僧正覺讚は、先達の山伏也。那智千日行者・大峯數度の先達なりと見え、宇治拾遺に山伏のことくしげなる入來て、是は日頃白山に侍りつるが、みたけへ参りて今二千日候はんと仕候ひつるが、とき料盡きて侍り、まかり預からんと申上給へといひて。など見たり。

○船場河戸

千日町入口町家の裏なる犀川の河戸をば、世人船場河戸と呼べり。犀川橋架替の時、假の往來の爲め、舊藩中は此所に船橋を懸くる舊例也。按するに、菅家見聞集に、萬治三年犀川橋被懸替に付、橋より三町程下に舟橋を渡し、往來の旅人等を渡す。就洪水橋杭居難く、翌年四月廿七日落成、五月朔日渡初。とありて、萬治以前より船橋を架くる舊例なりしと聞ゆ。舊傳に、船橋を繋げる鎖は、作久間盛